

■ こういうモチベーションは美しいが、現実には難しいかも。

「医学部に行くんだってな」

駅舎の庇の下で清が横に並んだ。

彼は傘を持っていなかったの、京子は自分の傘をためらいつつさしかけた。

「おれも東京の私立の医学部に行くよ。将来、二人でこの村で医者やろうや」

清は前を向いたまま言い終えると、スピードスケートのスタートのように肩を低くいからせて吹きつける雪に向かって走り去った。

京子は誰もいなくなった空間に傘をさしかけたまま、雪になぶられ続けて呆然と立ちつくしていた。

それだけのことだった。

それだけのことが、もうひとつ本気になれなかった京子の医学部への受験勉強に拍車をかけた。清と二人でこの村で医者をやると。彼の子供を育て、村人に慕われるような医者になる。夢が目標に変わった。京子は努力した。眠くても、疲れても、この目標のことを考えると再び机に向かう気力が湧いた。

■ 以下は、「五年遅れのあとがき」からの引用。著者の生きざまがわかる。

『ダイヤモンドダスト』で第百回の芥川賞を受賞したのが一九八九年。それまではあくまでもアマチュアの作家として書きたいときに書き、仕上がった作品を主に「文藝界」に送って何度か書き直しをさせられた上に掲載してもらおうとすることをくり返していた。

しかし、芥川賞作家のレッテルを貼られてからは締切を決められた仕事が待っていた。三カ月に一作、五十枚前後の短編を六編書いて本にする企画に乗ったのである。専業作家にすれば鼻先で笑いたくなるような軽いノルマなのだろうが、総合病院の呼吸器科病棟で年間五、六十人の末期肺癌患者さんたちを看取る本業の手を抜くわけにはいかなかったの、大変だった。原稿用紙に向かうのは平日の夜か週末に限られていたのだが、勤務先の病院まで自転車で五分の住宅に住んでいたの、入院患者さんの容態変化を知らせる病棟からの電話はひっきりなしにかかってきた。

(中略)

いま考えれば、こんな綱渡りみたいな生活が長く続くはずがなかったのだと分かる。芥川賞受賞の翌年に短編集を一冊出してから、私は小説が書けなくなった。そればかりでなく、医者をしてゆく自信もなくなってしまった。

自分が存在していることそのものへの不安。死への恐怖。体のふらつき感。焦燥。動悸。いら立ち。不眠。

(中略)

それから二年余が過ぎ、私の内で再び書きたい欲が芽生えた。ただ、これまでのように内向するだけの、深刻ぶった、いわゆる純文学らしい純文学は書きたくなかった。肩の力を抜き、己を救うためのユーモアを交えた小説を書きたかった。

そんなとき、ふと頭に浮かんだのが医学生頃の思い出だった。

(中略)

若い頃に捨て去ったはずの故郷が、ある年齢になるとたまたま懐かしくなったりする。『医学生』執筆の動機はまさにこの感情であった。

戦後初めての国立大学医学部として新設された秋田大学医学部の二期生として入学した私は、校舎すらない劣悪な環境に嫌気がさし、ほとんど講義には出なかった。実にネガティブな学生生活であった。

(中略)

この小説はこれまでのところ私のただ一つの書き下ろし作品である。つまり、文芸誌に発表しないで、いきなり本にしたのだ。

説明すると長くなるので省くが、私は純文学と大衆小説の区別は明らかに存在すると思っている。芥川賞の対象になる作品と直木賞受賞作は違うのである。

『医学生』は意識して大衆小説にした。なぜなら、病んだ私は気軽に読めるものが欲しかったからである。書きながら自分が安らぎたかったからである。